れた作品として高く評価されています。

それらの作品の中で、もっとも長く人々の心をとらえ続け、若松賤子という明治初期の女流文学者の名前を後の世までとどろかせたのは、『小公子』の翻訳でした。

『セドリックには、誰もいうて聞かせる人がありませんかったから、何も知らないでいたのでした。おとっさんは、イギリス人だったということだけは、おっかさんに聞いて、知っていましたが、おとっさんが、おかくれになったのは…』

このような書き出しの『小公子』は、アメリカのバーネット夫人の『リトル＝ロード＝フォントルロイ』という物語の翻訳で